

豊明希望チャペル礼拝

2026/5/24

「一つのからだ」

ローマ人への手紙 12 : 3～5



ほとんどのプロテスタントの教会では、キリストの像、キリスト像を置く教会はないのですが、カトリック教会や、一部のルーテル教会などでも、キリストの像を見る事が出来ます。

へんな話しですが、また、まことにある意味で聖書的なのですが、人が作った像である限り、歴史を経て、劣化し、壊れたり欠けたりする例が、ままあるのです。その場合、直すか、そのままにしておくわけですが、案外、たいてい、それはある一つの理由で、そのままにしておく例が多いとも言われています。(ドイツの聖堂のもの。イギリスの教会のもの。日本のルーテル学院大学にもある。←これは、フランスのストラスブール教会)



このフランスのストラスブール教会の場合、第二次大戦の爆撃の中で、天上から落ちてきた梁(はり)で、手が壊れました。現地の芸術家たちが、自分が手を作らせてくださいと申し出ます。教会はどうしようか話し合いましたが、ドイツの例や、様々な教会の例を参考にして、このまま直さないでおうと決めました。(←インド ゴアのボム・ジーザス大聖堂)

たとえばイギリスの例はこうです。やはり同じ、戦争中、ドイツ軍の空爆によって腕が取れてしまいました。戦後、それを聞いたドイツの学生達が、その像の修復を申し出ます。像の前のプレートには、「私のところに来なさい」と刻まれていました。さすがにその意味であれば、手がないと様になりません。

ドイツの学生達は、イギリスの教会の人々と議論を重ねました。どうやって修復する

か。結果、プレートを取り替えて、像は、腕のないまま残すことにしました。そして、そのプレートにこう刻んだのです。“Christ has no hands but ours”「キリストは、私達の腕以外の腕を持っていないのです。」世界中でキリストは働いておられる。私達は、その腕となって世界中に出て行かねばならない。キリストの足とも、ならねばならない。その足をもって、キリストの足として世界中に出て行かねばならない。私達自身が生きた供え物として(ローマ 12:1「生きた供え物」、世界に献げられねばならない。

すなわち、前回、開いた 12:1 です。

「12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

キリストの腕にふさわしい、キリストの足にふさわしい、神に受けいれられる、聖い、生きた供え物とならねばならない。ある人は足となり、ある人は腕となって、ともに力を合わせて、私達こそが、世界に献げられなければならない。そう誓ったというのです。

ルーテル教会の例も、そのホームページには、こうあります。

「本館二階に立つ「両手のないキリスト像」(作者不詳)は、見る者に「あなたがキリストの手なのだ」と静かに呼びかけています(コリントの信徒への手紙一 12 章 12～27)。」すなわち、

コリントの手紙 I 「12:27 あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。」

また、こうあります。「12:12 ちょうど、からだの一つでも、多くの部分があり、からだの部分が多くても、一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。」

お気づきになられたかとも思いますが、今日の箇所の 12:5 に、似た聖句があるわけです。あらためて、今日の聖句を読みます。

「12:12 ちょうど、からだの一つでも、多くの部分があり、からだの部分が多くても、一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。12:13 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。12:14 実際、からだはただ一つの部分からではなく、多くの部分から成っています。12:15 たとえ足が「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。」

様々な手のないキリスト像の精神は、I コリント、また、この聖句から来ている考え方なのです。あなたが、キリストのからだの部分となりなさい。手が足りないなら、手となり、足が足りないなら足となりなさい。それが礼拝であり、教会だと、あるいは、キリスト者のものの考え方だということです。

前回の話しに少し戻りますが、12:1 先に読みました「**あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。**」の部分です。

礼拝とは、あなたの体を、生きている、今のその体をという意味です、それを、神に献げなさい、神に使っていただきなさいと言うことです。

これが、私たちの「礼拝」の仕方だと。

ローマの教会の特殊性は、ユダヤ人だけでなく、ローマ人も、ローマ人でもローマ市民、自由人でない、様々な国から来た奴隷の立場の者もいると。ギリシャ人もいると。それは、ローマ教会の豊かさであると同時に、問題、欠点でもありました。育った背景が違いますから、気持ちが一致しないのです。ボディラングージ(からだの言葉)という表現があるくらい、私たちの体、振る舞い方には、原語以上の意味があって、それぞれに文化的な背景があって、たとえ言葉だけ、ローマにいるのだから、イタリア語を話しましょうと言って見ても、やっぱり、合わないのです。

アメリカ人に、手招きしたら、げげんな顔をしてあっちに行ってしまったということがあります。それは、日本などでは、手招きは、上から下に手を振るのですが、アメリカなどでは、下から上に手を振るのであって、上から下に手を振ると、あっちへ行けと言われてるように、見えるからです。

おそらく、パウロは、そんなローマ教会の特殊な事情の中で、教会が一致できない、一致がむづかしい、その問題に対する質問状を受け取ったのではないかとも思われます。すなわち。

「12:13 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。」

とパウロが言わなければならなかったのは、そういう事情です。

パウロは、そんな彼らに、何と言ったでしょうか。こう言いました。

「12:14 実際、からだはただ一つの部分からではなく、多くの部分から成っています。12:15 たとえ足が「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。」



「からだ」は、教会、あるいは、クリスチャンの交わりを指すと同時に、キリストの体をたとえて、思い描くようにとっています。

私は、私たちクリスチャンのことを、トランスフォーマーという変身するロボットにたとえましたが、この場合、特に大事なものは、私たちは、道具ではない、まして機械の一部ではないと言うことです。このことが、まずは、ここで、一番、強調しなければならない点です。すなわち、生きたキリストの体の一部だと言うことです。

15 節で言われている事はそれで

す。

「12:15 たとえ足が「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。」

手が、手をケガした、痛いよー、血が出たよーと叫んでいるとき、足が、わたしや手じゃねえから、関係ねえよと言わないだろうということです。

機械の一部なら、もしかして、それは、会社の組織とかでも、そういう扱いがされることがあるかもしれませんが・・・歯車の一つ、機能しなくなったら、取り替えればいいだけの存在、会社の組織でもそういう考え方はダメだと思いますが、すなわち、生きていない機械なりの一部だということですが、生きたキリスト、有機体というのですか、パウロは、ローマ教会は、その一部だと考えるべきだと考えるようにと言っているのです。というより、その生きたからだは、キリストだと、そのキリストの体の一部だということなのです。

キリスト像ではないですが、私たち人は、鑄造(ちゅうぞう)して、粘土か何かで作って、付け加えればいい、そういう存在ではないと、聖書によって教えられていたからこそ、そういう発想になったということなのです。

直さない。私が、その一部となると。

教会の組織を考える場合も同じ。この人がいなくなったから、他の人をあてればいいというそういう事にならないと言うことです。その一部の人は、人は、取り替え可能な歯車ではないと言うことです。その人が働けなくなった、いなくなったから、他の人で当てれば良かったね、ではない。それは、教会の傷みであり、取り替えようがない損失だったということなのです。もちろん、だからこそ、一生懸命に皆で、その欠けを補おうとする、それが教会だと言うことです。

すでに終わりの方になってきてしまいましたが、12章は、具体的なキリスト者の生き方、信仰者のこの世での生活の仕方、あるいは、教会で言えば、教会の奉仕、そういう課題を語っていくと前に言いました。そして、12:1は、その精神をまず、語り、教のところでも、その考え方を教えているのです。具体的には、次回6節から、また、この世での歩み方というテーマでは、13章からが具体的な教えになります。

それで、その前提としての、最後の教えが、今日の箇所だと言うことです。

それは、私たちが、とりわけ、教会員として、クリスチャンの交わりとして協力しながら歩むとき、キリストの体の一部である自覚をもつ、その精神を教えていると言う事です。

そして、その精神とは何でしょうか。最初に、ギリシャ人、ローマ市民、奴隷、ユダヤ人などの教会だったと言いました。そして、それは、教会の一致と交わりをむつかしくしていたと言いました。もう少し言えば、お互いがお互いのことを、必ずしも、必要としていないことを意味します。

もう少し別の言い方をすれば、お互いにとって、ふさわしく無い者が、この群の体を形成していると言うことです。それは、手だ足だと言っても、お互いにとって、まことに役に立たない手であり、足であった教会がローマ教会であったということなのです。

バルトという神学者は、この箇所を、キルケゴールの言葉を引用して、ここで示されているのは、「・・・私が、いわば生存(からだ：命)を爆破し、同時に躓(つまづ)きで

ある存在」で、もっと言えば、われらは、神の体の阻害要因であることを謙遜に認めよと言っているのだと言いました。だから、3 節で、思い上がるな、あるいは「慎み深く考えよ」と、命令されなければ、言われなければわからない存在であることを認めなくてはならない、そういう欠点だらけの人間が、あわれみによって、キリストの体の一部とされていることを思って、謙遜に互いに仕え合わなければならない、それが、教会という場所であり、クリスチャンの交わり、愛のあり方だと言うのです。

乱暴に言えば、お互いが教会の交わりにとっての阻害要因だと。A さんも B さんも阻害要因。ついでに牧師も阻害要因だと。ローマ教会も、コリント教会も。それでも、イエス様は、神さまは、その十字架と赦し、圧倒的な愛によって、一つの体にされていると。だから、感謝と謙遜のうちに、祈りあい、互いの仕え、歩もうと。

以前、幼稚園をしていたとき、「牧師先生！」と叫び、私の足にしがみついて話さない子がいました。歩けないから離してと振り払うのですが、しかし、同時に、こんな私を慕ってくれて・・・と、涙が出そうになるほど愛（いと）おしく嬉しくなりました。そのとき、何も出来ないと思われる年少の子が、歩けないからあっち行ってと、まさに阻害でしかない（笑）はずですが、その存在が、私にとって喜びの存在でした。教会がキリストの体であって、その内容が、存在の喜びであるということは、まさにそのことだと思わされるのです。罪人であって、罪人の集まりであって、お互いが、必要とし、必要とされるだけではなくて、かえって、傷つけ、阻害であると、一見、思えてもです。だからこそ、“**Christ has no hands but ours**”「キリストは、私達の腕以外の腕を持っていないのです。」世界中でキリストは働いておられる。私達は、その腕となって世界中に出て行かねばならない。

この週、この精神を持って、この聖書の価値観をもって、この教会から、この世に遣わされていきたいと願います。